

氏名 _____

■生きる力 の原点としての人間関係

生きる力を育てる＝人と人との支え、つながり、ともに生きる（人間関係）

人間関係の基礎は家庭、地域である。家族の一員として親や兄弟との“ひととの関わり”を愛情や信頼関係の中で実感し身につける。

保育所や幼稚園の役割

豊かな関わり場所、心と心との結びつきが築かれる場

■人との関わりを育てるとは

人とかかわる力は周囲から見守られている安心感や安定感から生まれる。

また人に対して信頼感を持ち、そこから自身の生活の確立によって培われる。

■教育要領・保育指針における保育の基本

幼児の生活の姿

“さながらの生活”から“より充実した生活”へ

子どもらしさとは・・・好奇心にみちあふれ、知りたがり屋

活動的、義務感からやるのではなく没入し没頭する。体で実感し分かったことや感動したことなど他人（友だちや保育者）に伝えようとする。

ともにある ことを求める存在

幼児にふさわしい生活とは・・・保育者との信頼関係を基盤として、幼児がやりたいことに集中して取り組むことができ、個が生かされる生活。個とは、友達と発想を交流しあい、影響しあうことであり、集団で育ちあっていく。

○環境を通しての教育 環境構成（時期や生活の流れに即したねらいや内容設定、それらに即した環境を構成→幼児の活動を生み出す）

○遊びを通じての指導 義務ではなく主体的な取り組みから真の発達へ。主体的な活動＝遊び＝総合的な要素→指導

○個と集団を生かした指導 子どもや保育者が環境からそれぞれに意味を見出す＝生きて働く ※幼稚園教育要領の総則、幼稚園教育（3）

「一人ひとりを尊重する」同年代の幼児が集団で生活することを通して共に過ごす楽しさを味わったり、互いに高めあうなど集団のもつ教育力から発達が促される※幼稚園教育要領解説

■教育要領・保育指針のしくみ

・幼稚園教育要領 ・保育所保育指針

5つの領域 健康、人間関係、環境、言葉、表現

ねらい／心情、意欲、態度 幼児が育っていく方向性を示したもの

人間関係「幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう」

「進んで身近な人とかかわり、愛情や信頼感を持つ」

「社会生活における望ましい習慣や態度を身につける」

◆アヴェロン野生児

18世紀末、南フランスのアヴェロン地区の森で1人の少年が発見された。発見された当時、11歳～12歳で言葉を持たず、人間としての感情に欠け、野生行動をとることが特徴であった。団栗、ジャガイモ、生栗しか食べず、ベッドで寝ることをひどく嫌がった。また目の前に出されたものは何でも嗅いでみるという執拗な習慣を持っていた。青年医師イタールは「この野生児は、人間的に生きる経験・環境をもたなかったためにこうした状態にある。適切な訓練によって人間としての行動や生活様式が身につけられる」と考え教育訓練を行った。内容は5つの分野に渡る。1. 生活に慣れさせること 2. 感受性の訓練 3. ものの概念について学ぶ 4. 話し言葉の習得 5. 文字の習得 また人間関係についても親愛の情を示したのは世話人1人のみで、6年間にわたる教育訓練で多くの面で進歩はみられたものの、普通の子どもの発達レベルに到達することはできなかった。イタールによって報告された他の例では、17世紀フランスでごく幼い時期に森に遺棄され、孤独な生活を送っているところを発見された者が何人かいる。その中に、森で1人と友だちと暮らした少女が、後にある程度の知能を獲得し、また記憶力は森の中での生活場面や友だちのことを詳しく思い出せるほど発達していた例もある。

氏名 _____

■1人の子どもの育ちを見ることの重要性

保育者は一人ひとりの子どもを深く理解し大切に育てていくことが求められている。深く理解することは現在の集団の中で見せている一断面だけではなく、その裏の見えない姿や思いをつかんでいくことであり、そこからそれぞれの子どもをどのように支えていくか分かってくるのが集団の中で子どもを理解し育てることである。

■おとなとこどものかかわり

乳児期の子どもは養育者から世話を受けて生活する。養育者は単に養育行動をするだけではなく、赤ちゃんがぐずぐず泣く時は抱いてやさしくパッティングしたり、子守唄を歌ったり大人の方から何らかの言葉をかけていく。このように赤ちゃんの気持ちを受け止め、それに答えていく養育者の気持ちが、子どもを“育てる”根幹にあるものである。

◆乳児期の人間関係の特徴 保育内容「人間関係」 北大路書房 小田豊・奥野正義 編著 59 - 60

この時期の子どもにとって母親（養育者）との関係が初めての人との関わりである。この関係では人としての基本を学び、社会化の過程において重要な役割をもつ。この関係において、とくに重要なことは愛着の形成である。

愛着発達過程の4段階（Bowlby, J1969.）

第1期（誕生から8～12週頃まで）前愛着

乳児は物事ではなく人に対する志向や、興味を示すもの特定の人物を弁別することはできない。他者に視線を向けたり、掴んだり、手を伸ばすことができる。誕生時には[泣く]ことにより人との接触を促進させることができる。しばたくとすると、微笑みなどによってそれらができるようになる。

第2期 第1期終わりから7カ月～1歳くらい 愛着形成

特に身近な人へは親しみや喜びを示すようになる。さらに、養育者とそれ以外の人との区別ができ、養育者との接近を強くするようになる。

第3期 第2期終わりから2～3歳まで 明確な愛着

這う、歩くなどの移動する能力が増し、養育者に対する接近も向上するとともに、物理的環境を探索する能力を増す。乳児は養育者を自分にとって安全な[基地]としてみなすようになり、そこから周囲の世界を探索しようとし、危険を感じると養育者のもとに戻るといったことを繰り返すようになる。また養育者が乳児から離れようとする、いやだという意思表示をしたり、しがみついたり、恐れ表情を示す。

第4期 第3期の終わり以降 目標修正協調関係

養育者の目標、感情、視点を理解し、自らの行動をそれに適合させようとする。

0歳の育ち

1歳の育ち

2歳の育ち

3.4歳

3歳…相手の存在に気づく＝他者との触れ合いの機会が増える。ぶつかり合いを通して気づきあうケースが多い。衝突、葛藤を多く経験し、友達作りの本格的開始時期。「どいて」の発言、譲る、待つ、我慢する、「一緒に○○しようね」人と遊ぶ楽しさを感じる。

4歳…友達関係の広がり、深まりが顕著に見られる時期。園生活での集団やグループを意識しながら友達と生活する楽しさを経験する。コミュニケーションを行うための社会的技能を身につけていく時期である。

氏名 _____

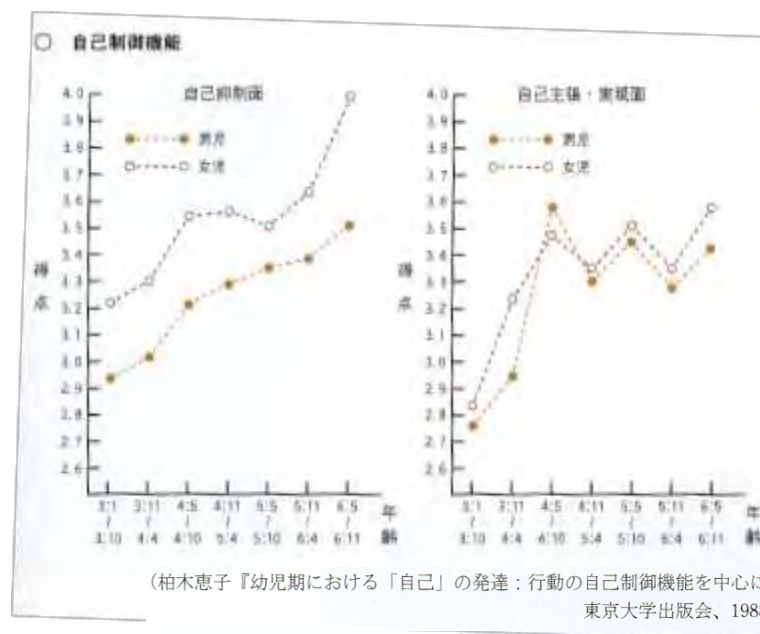
子ども同士のかかわりの主である“遊び”がどのように変化していくかについてパーテン (Parten,1932) は以下のように分析している。

■年齢の近い子どもたちとかかわり

観察 1～14 の様子から、成長の中で人との“かかわり”がどのような変化をたどっていくのかまとめなさい。

何もしない行動	興味をひかれたものを眺めたり、移動したりしていることを指している。2.3歳以下でわずかに見られるとされた。
ひとり遊び (2歳頃まで)	他の子の近くで遊んでいても、互いにやり取りがない状態であることを指す。2歳から5歳へ年齢が上がるとともに次第に減少している。
傍観的行動 (2歳半頃)	他の子の遊びを近くで見ている状態である。相手に話しかけることを含む。2歳半頃、頻度が高くなるとされている。
平行遊び (3歳頃)	他の子の近くで、同じようなおもちゃを使って遊んでいるのだが、互いのやりとりが見られない状態。2.3歳で高い頻度で見られるとしている。
連合遊び (4歳頃)	同じ内容の遊びを複数で行うこと。おもちゃもやりとりや、遊びにかかわる会話が生じている。このような遊びは、年齢に伴い増加していく。
共同遊び (5歳頃)	組織化された遊びとも呼ばれ、共通の目標をもって、組織を作って遊ぶ状態である。3歳以下では見られず、4歳から5歳にかけて、年齢が高くなると見られるとしている。

■自我の育ち—ぶつかり合いと葛藤を経験する



自己主張・実現面とは自分のやりたいことを言える、いやなことをはっきり言える。自分の考えやアイデアを話すことなどで、3歳から4歳にかけて急激に上昇している。一方自己抑制面とは順番を待てる、貸し借りができる、ルールを守る、感情をすぐに爆発させないなどで、3歳から小学校入学まではなだらかの上昇している。両者とも上昇するが自己主張・実現面は4歳頃からは横ばいになっている。つまり順番やルールを守るなど、我慢することができるようになってくると、一方で、自分を主張するということ、自己制御によって抑えられてくるといことなのだろうか。

■人とかかわりが育つ道すじ

0歳児

愛着関係（アタッチメント）＝人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき

◆アカゲザルの愛着形成に関する実験 保育人間関係／北大路書房・小田豊編著

何をもとに子ザルは母親に愛着を感じるようになるかを明らかにする実験。授乳と感触について取り上げ実験した。ハーロウ（Harlow,H.F、1971）

この実験から「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて特定の対象と近接を求め、またこれを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾性であるとし、この近接関係の確立・維持をとおして、自らが“安全であるという感覚”を確保しようとするところの多くの生物個体の本性がある」とボウルビーは述べている。

子どもがアタッチメントを形成するには単に一緒に過ごせば良いだけではなく、子どもの発信したことに対し、養育者が応じるという経験を繰り返す中で、子どもは五感を通じて安心や愛着を感じ取り、愛着関係が形成されていく。これらが人間関係の基礎となる。

【泣くことからみるコミュニケーション】 参考 0歳児の育ち事典／今井和子監修・小学館

誕生	産声
生後1週間	おむつ汚れやおなかが空く時1日10回以上泣く。それ以外はほとんどうとうとしている。
生後2週間～1ヵ月	眠りと目覚めがはっきりし、泣き声が大きくなる 良く泣く子、あまり泣かないなど差が出る。
2～3ヵ月	脂肪がつき出しふっくらしてくる。おもに不快を感じた時に泣き、また世話をしてくれる人の心地良さを経験し、泣いて誰かを呼ぶようになる。喃語の発達、たそがれ泣き
4～5ヵ月	母親の声や抱き方、においに愛着を感じる。母親の姿が見えなくなると泣くことが出てくる。夜泣き
6～9ヵ月	人見知りで泣く。知恵の発達とともに泣く理由も複雑になる。母親がいなくて泣く、物を取られて泣く、思い通りにならず泣くなど。
10ヵ月～1歳	行動範囲の広がり、自我の芽生えとともに自己主張しようとする。自分の思いを表現できなくて泣き叫んだり自分で何でもやりたい気持ちが育つ。後追い

どのような時に泣くのか…

- ・快と不快の感情の芽生え・思い通りに体が動かせないとき・人見知りと後追い・一人でしたい・要求が通らない時

子どもが泣いていると「泣きやませなければならない」と直接的に考えてしまいがちだが、泣かずにいられない子どもの思いを受け止めることが必要である。なぜ泣いているのか、どうしたのか、という、問いかけてみるような養育者の温かい姿勢によって、子どもは混乱なく自分の感情に素直になることができる。またその感情を受け入れてもらえる関係の中で自分の思いをしなやかにコントロールする力を高めていくことができる。

②1歳～2歳児

言葉の習得 発語への意欲

社会性の芽生え（自己主張、コミュニケーション）

他人への興味

ものへの興味や愛着心

遊びの発達（ごっこ遊び、ままごと遊び）

【1歳児 子どもの人権を尊重する保育とコミュニケーションのかかわり】

自我が芽生え、自己主張が始まる次期（1歳半～2歳にかけて）

自分の存在に目覚め自分が自分の主人公なのだ主張する自我の芽生えこそ大切に育てなければならない時期である、子どもの人権^{*}の尊重に繋がる最も重要な時期である。まず信頼できる愛着対象の大人とのぶつかり合いからコミュニケーションのとり方を学んでいく。「だめ」や「いけません」の大人の一方的な圧力でしつけようとするとせっかく芽生えてきた自我の芽を摘み取ってしまう。大人と子どもが対話の中で、交互に考えを伝えあい「折り合いのつけ方」を体験させていくことが大切である。※保育所保育指針第1章、2「保育所は（中略）入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない」児童の権利に関する条約1994（子どもの権利条約）

【2歳児とのかかわり】自我の育ちと自律の芽生えを支える保育者の役割

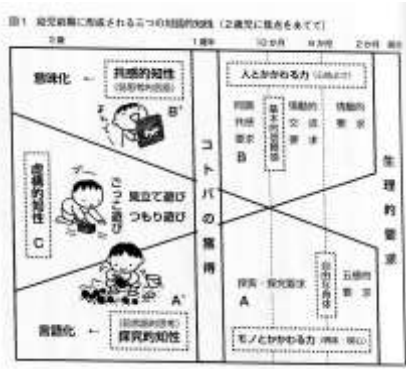
言葉の急速な進展はあるものの自分の感情やイメージをまだ言葉で表現しきれない。子どもの気持ちは大人の「共感」によって子どもは自己確認強まっていく。例）「痛かったんだね、ここが」「○○ちゃんも欲しかったんだね。」

これらの共感される言葉から自己肯定感（自尊感覚）が育ち、情緒も安定する。

保育内容 人間関係 「人とかかわりの発達④」 氏名 _____

■人とかかわりが育つ道すじ

ロシア心理学者 L.S ヴィゴツキーは「子どもにおける思考と言葉の発達からわれわれが知る最も重要なことは、2歳ごろに現れる一定の時期に、それまでに別々に進んでいた思考と言葉の発達路線が交叉し、一致するようになり、人間固有のまったく新しい行動形式に出発点を与えることにある」参考 2歳児の育ち事典/今井和子監修・小学館



このように2歳児は探知的知性・共感的知性、虚構的知性の3つを獲得。発達させていく。これらは別個の論理や道筋で発達するためこの時期の保育実践ではこの3つの知性がそれぞれ豊かに育つよう実践をデザインする必要がある。

3つの知性はそれぞれの知性が強い自己主張をとめないながら発達する。そのため成長すればするほど、トラブルが多くなるのがこの時期の特徴でもある。

これらの2歳児の成長の過程を認識し、正しく対応していくことが重要である。

主体的な活動

乳幼児の発達における養育者、保育者の役割の重要性とは何か考えなさい。

人見知りとは人とかかわる上で、重要なポイントとなる。なぜ大切なのか考えなさい。

自律

子どもの要求は抑え込むのではなく、発展・拡大するように環境を整え、子どもの主体性、能動性を引き出す保育をデザインしていく。また表現される子どもの要求に対して「受け止めて、切り返す」「受け止めて、意味付け直す」というキャッチボールのような対応をしていく。

③3歳児

活動範囲の広がり、遊びの多様性（ひとり遊び、平行遊び、傍観的行動）

- 身の周りの自立
- 表現の広がり
- 友人関係の形成

一応の内的秩序を作り上げた3歳児は自信にあふれ、より大きな展開を求めて外に目を向ける。友だちは2つのことを体験させる。1つは自己主張の衝突や競争、他の一つはともに遊ぶ楽しさである。2つの体験はともに自己統制への道につながり、関係の中に生きることを学ばせていく。こうして子どもは天動説の世界から、自らをも客観視しうる地動説の世界をも徐々に受容していく

間藤 侑：子どもの発達と人間関係 建帛社

④4～5歳児

集団遊びの発展（ルール、役割の意識）

友人関係の広がり

所属意識、集団の中の自分

子どもが自己発揮していくと、周囲とのぶつかりが様々な場面で生じる。幼児同士のぶつかりや、大人に対する強い自己主張にはどのような配慮が必要か、考えなさい。

絵本の作品の中から、子どもの人間関係の育ちが良く見えるものを選び、成長のきっかけになったできごと、また成長のきっかけに期待できる内容など考えてみよう

タイトル
話の概要
どのようなところが人間関係の成長に繋がると考えるか

タイトル
話の概要
どのようなところが人間関係の成長に繋がると考えるか

氏名

■家族とのかかわり

近年の少子化、核家族化⁽¹⁾の影響は子どもの生活に大きな影響を及ぼしている。女性が一生に生む子どもの数を示す合計特殊出生率は平成17年度に1.25となり将来人口の維持水準である2.07を下回っている。(平成26年合計特殊出生率1.42 厚生労働省調べ)

子どものいる家庭では2人きょうだいは56%を占め、1人っこの11.7パーセントより多く占めているが、それでもせいぜい1人か2人の子どもを育てる家庭が大半であるということである。少子化は近年の社会問題でもあるが、きょうだいとのかかわりを経験する子どもが年々減ってきていると言える。

事例で学ぶ保育内容 無藤隆監修/萌文書林

きょうだいや祖父母とのかかわりは、子どもにとってどのような意味があるのだろうか。自分のこれまでの歩みを振り返って経験やそれらから考えられることをまとめなさい。

⁽¹⁾ 消費者庁のホームページでは核家族化についてこのように述べている。

工業化、都市化などさまざまな要因により、家族は形態も機能も大きく変化してきた。特に戦後の変化は急速であり、一世帯当たりの平均世帯員数は、1950年(昭和25年)に5.0人であったが、1975年(昭和50年)には3.4人に減少した。都市に移動した人々の多くは、夫婦とその子供のみを基本的構成単位とする核家族を形成するようになり、大家族の拘束感や緊張関係から解放され、戦後の民法改正等もあって自由な家族関係の精神が根付いていった。同時に、核家族の中での育児の負担の増大、高学歴化に対応するための教育費用の増大、急激な都市化の中での劣悪な住宅事情等を背景として子供の数も減少し、家族の規模は小さくなってきた。

問題点…かつて大家族の中でさまざまな大人のタイプを知り、それらの人々の人生の姿を身近に見聞きしながら多くの兄弟との切磋琢磨の中で自らの生き方を学んでいった子供達は、今や両親と1人や2人の兄弟だけの家族の中で必要な社会性を身につける機会も少なくなっている。更に、親も育児の知識等の世代間の伝承が断たれたため、家族生活において精神不安を起こすなどの問題も生じている。

■園と家庭の連携を通して

★幼稚園教育要領解説第3章第2節

子どもを共に育て 子ども成長と共に喜びあう＝協力体制

○幼稚園における家庭・地域と連携した子育て支援の充実・家庭・地域の連携した子育て支援の考え方は。(新しい時代の幼稚園教育を実現するための施策提言2000年2月)

○さまざまな家庭との連携

■保護者との関わりを考える

保育者は家庭との連携で、相手の立場を受け入れ、その立場になって“そうせざるを得ない事情”など共感することで、保護者が心を開き、親しい関係をつくるのが大切。

そして、保育所や幼稚園は子どもを育てる場でもあり、「親と子の育ち」の場になることを支援していく場でもある。

氏名 _____

園児の母親と言葉の交わり方 清水エミ子著／学陽書房からみる対応実践

保護者との関わりを考える

■事例 I

「うちの子は先生が怖いから言いたい事が言えない。クラスを替えてほしい」と強く主張した
3歳男児 T 男の母親

母 「ハサミがない。なくなっちゃったから、幼稚園に行かないと言っているの『先生にハサミがないの』って言えば先生が探してくれるわよ」と言うんですが、『言えない』って言うので『お話できるお口があるでしょ』と言ったら『先生が怖いから言えない』と言うんです」

保 「どう怖いと言っていますか」

母 『きちんとおかたづけしなかったって、だめね、って言うから怖い』と言うんです」

保 「叱られたと思ってしまったんですね、担任の言い方がきつかったかも知れません。叱っているのではないですが、お母さんより語尾が強いので、T 君には叱られたと思っ
てしまったのですね。申し訳ありません。よく指導し注意しておきますので、お母さんからも T 君に怒ったのではなく、お話したのだとお伝えください。」

母 「それでも駄目でしたら、T の気性に合っている先生のクラスに替えてください！！！」

■事例 I から指導について考えること

保護者とうまくいく方法／原坂一郎著(元保育士、子育てアドバイザー)ひかりのくに出版より

- ・保護者は初めて出会う先生の第一印象を 5 秒で決める、第一印象をよくすることを心がける外見・態度・言葉遣い・表情・笑顔・★感謝の言葉を使う。
- ・保護者は「みんな」の中の一人ではなく、1 人 1 人との 1 対 1 の関係作る。
- ・先生の方からなるべく保護者に声かけするよう意識する
- ・保護者に積極的に子どもの事など褒める。
- ・園のことで質問を受けた時、すぐに園長先生へ、と回避せず、親切なかかわりを
- ・先生が保護者のよき話し相手、相談相手になり、心を開き互いにいい関係を築く。
- ・その日あったこと、こどもの園での様子を、小さなことでもいいので保護者に伝える。
- ・連絡帳に子どものマイナスになることは書かない。困ったことなどは、口頭で。
- ・連絡帳に書かれたことにコメントをする

<クレーム対応編>

- ・保護者はクレームを言う時、その目的は気持ちを分かってもらうこと、理解を寄せてもらいたいということである。満足してもらえよう、言われたことを反論ではなく、肯定言葉を使って「そうですか」「ごもっともです」「わかりました」受け入れられない事案については丁寧になぜ受け入れられないか、説明を行う
- ・保護者からの要求やクレームに対し、内容がどのようであれ、まず謙虚に受け止めていく。
- ・こちらに言い分があっても、まず最後まで話してもらおう。話を途中でさえぎらない。
- ・話し合いが物別れに終わりそうな時は、少しでも相手が納得する言葉を言い、話し合いの終点をつくっていく。
- ・要求やクレームが来た時に早口になってしまいがち、落ち着いてゆっくりめに話し、穏やかな話し合いになっていくよう意識する。
- ・すぐに対応できるものはその場で対応し、急を要しない要求は即答で退けず、要求を検討する機会を持つ約束をするなど、否定しない。
- ・子どものケガや傷は保護者に必ず報告する。自分の価値観でケガの大きさを判断しない。ケガをしてしまったこと(転んだり、かすり傷はよくある)もそうだが、一番良くないことは、保育者が全くケガに気づかず、家に帰って保護者とその傷に気づくこと。登園時の子どもの様子をよく見ること。
- ・職員同士の連携が悪いとクレームが出やすくなる。情報共有するよう心がける。

氏名 _____

■実際の現場でのトラブルを考えてみよう。またその対処方法、指導方法についてもグループで話し合ってみよう

《ケース1》

《原因》

《原因》

《その対処方法、指導方法について》

《その対処方法、指導方法について》

感想

<p>感想</p>

氏名

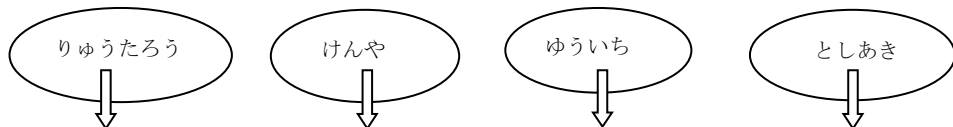
葛藤体験を通して

■子どもどうしのかかわり

性格

普段の保育士の働きかけ

トラブルを通して見えた姿・成長



■保育者どうしのかかわり

様々な大人がそれぞれの個性で、その人の持ち味を生かして子どもにかかわることで、園生活が豊かに展開される。

保育者は「自分のクラス、自分の保育」に閉鎖的にならず、保育者「みんなで保育していくこと」、を考えていかなければならない。そのためには、子どもの姿を伝える・保育者が本音で考えを出し合える機会を持ち、そこから**連携**が生まれ、互いに**理解し共有**していくことができる。共に保育をしていく連帯感・温かい関係→子どもも保育者の思いやりや、温かい雰囲気に触れ成長する。

■チーム保育

チーム保育には、例えば、数名の教員が2学級以上の指導にあたる方法、得意な分野を出し合った保育方法、集団での扱いの中の一人に対するものである場合、職員の仕事の特性を生かすものである場合、複数の教員が学級の担任となる方法など色々ある。

協力体制を複数の保育者が組織的に、柔軟に、臨機応変におこなっているとみることができる。

■問題点・・・チーム保育における問題と課題について 堂本 2001

特に問題が発生しやすいのは、ベテラン保育者と若手保育者がチームを組む場合である。このケースでは、若手保育者に主体の喪失が起きやすくなると論じている。またこのような組み合わせだけでなく、チームを組む保育者同士が主従の関係に立つときには常に困難な問題が起きる。主導的な保育者と補佐的な保育者の間に保育意図のずれが生じると、子どもも混乱する、これを防ぐために補佐的な保育者は主導的な保育者の意図を察知して動かなければならにことになる。しかしそれはたやすいことではない。

■チーム保育を成功させるために

氏名

子どもが、子どもどうしでかかわることが、なぜ必要なのか。自分の考えを書きなさい。

保育者同士の人間関係から①

隣合わせに位置する4歳児クラスと5歳児クラスは、年齢も、わが子の年齢や家族構成も似ている中堅保育者が担当している。子どもにも大人と同様に意思があることを認め対応するような、子ども観、関わり観も筆者から見ていると似ている。折に触れて、相談しながら、一緒に散歩に出かけたり、ホールで合同に昼食を食べたりする。子どもも自然に、互いのクラスを行き来する日々を過ごしてきた。

節分行事も、4歳児担任が全体の進行役であったため、この行事の主軸となる5歳児担任の意向をよく聞き、「話し合いがよくできて、やりやすかった。隣のクラスの相手が違えばこんな風にはできたのか…」と5歳児クラスの担任は言う。

保育者の価値観の相違②

未満児クラスのA保育者（保育歴13年、30代半ば）は、子どもが自らやり出す遊びを主体とした、いわゆる自由形保育形態の公立園の正職員である。市町村合併を機に、一斉型保育形態の私立保育所勤務が長かった50代の臨時職員B保育者とともに、チーム保育をしている。正職員という立場上、主と副というとらえ方をすれば、歳は若いのが主である。

A保育者は、まだ2歳児なのだから『やって』という子どもの要求に応じてあげてもいいのではないかと思う場面でも、B保育者は自分でやらせようと厳しく対応し、結局子どもはおびえるか、かえって言うことを聞かない。A保育者は「まだやってあげてもいいんでは？」と言うが、いつもB保育者に「まったく、公立さんの保育はいいかげん！」と言われ、内心むかつかると話す。同時になぜ自分はやってあげてもいいと思うのか、もっと説得力のある説明ができないと分かりあえないと反省もしている。

保育者が【 ①保育者 ②保護者】とのかかわりでどのような事を大事に関わっていくことがよいと考えるか。① or ②

氏名 _____

■遊びとは何か

遊びとは「自由で自発的な活動」「面白さ、楽しさ、喜びを追究する活動」「その活動自体が目的」＝自分自身、自分の興味・関心に沿って自発的に始める幅広い活動＝楽しさ

子どもは「遊ぶ」という行為をとおして、生活の仕方を学んでいる。
遊びは子どもの発達にとって非常に重要な活動である。

□自分の幼少期の遊びの様子を思い出して、どのように人とのかかわりがあったのか考えてみよう。

幼児は何でも自分でやってみようとする時期で、周囲の人や物に興味や関心をもってかかわり楽しさを感じます。つまり多様に動いたり、想像力を働かせたり、操作したり、構成したりして遊びを楽しみながら、様々なことを具体的にわかっていきます。これが小学校以降の学習に基盤となる「学び」をしている姿です。

「遊び」の中にみる子どもの「学び」

- ・自分から物事に働きかける主体性
 - ・自分で考え、判断して行動する力
 - ・イメージを広げ、想像力を豊かにする
 - ・試したり工夫したりする創造力
 - ・目的感を持ち、達成しようとする楽しさ
 - ・体を使って遊ぶ体力
 - ・友達と一緒に行動する楽しさ
 - ・相手の気持ちを感じて、自分の気持ちを調整
 - ・相手に合わせるなど、人とのかかわり
- 等

豊かな遊びができるように保育者は・・・

- ★保育者や友達との信頼関係づくり (温かく共感的な態度で)
- ★子どもたちが十分遊びこめる場と時間の確保 (興味・関心・楽しさを深く理解して)
- ★試行錯誤、葛藤場面の内面理解 (遊びで経験することを見る目をもって)

《遊びを通して育つ人間関係》

- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ■自分の気持ちを抑えること (自己抑制) ■自分の気持ちを出すこと (自己主張) ■他者の気持ちに気づくこと (思いやり) | } | 協力すること・ ルールを守ること
イメージやアイデアを伝えること
教える/教えられること |
|---|---|--|

遊びの段階

児童発達研究会編「児童の発達と教育」文研出版

①感覚遊び	視覚・聴覚など感覚で楽しむ。紙吹雪、笛を吹く、太鼓、水、泥いじり
②運動遊び	手足、身体を動かす遊び。乳母車押し、遊具遊び、ボール遊び、三輪車
③模倣遊び	ごっこ遊びから劇遊びなどに発展する。ままごと、身近な模倣
④受容遊び	児童文化財を享受して楽しむ。絵本、紙芝居をみる、テレビを見る
⑤構成遊び	物を組み立てたり創り出す。粘土、折り紙、工作、絵描き、創作ダンス

氏名 _____

■遊びの発達の筋道

3歳	発達	他者に気づき、互いが関係を持ちつつ生活するという事への認識。互いの自己主張によって衝突や葛藤を経験する時期。
	遊び	特定の仲間関係、ことばによる関わりが広がる。1人1人がイメージをもって遊びを展開。複雑なテーマやイメージの共有。見立て遊びやごっこ遊び。簡単なルールのある遊び「鬼ごっこ等」を保育者と一緒に行うことができ、遊びを楽しむ姿がみられる。また一人遊び、平行遊び（場所の共有をしているなど）の姿も3歳の特徴的な遊びの種類である。
	保育	この頃は遊びや遊ぶものを自ら探して主体的に活動したり、保育者とかかわり合いながら遊ぶ姿との両面が見られるようになる。一方で友達の様子を見ているだけのことが多い子どももいる。＝傍観的行動 この行動は1人遊びや平行遊びの前に見られるという様に理解されがちであるが、新しいことに出会った時にこのような姿が見られることも多い。

4歳	発達	集団を意識しながら友達と共に生活する楽しさや喜びを経験する。交流のなかでコミュニケーションを行うための社会的技能を身につけていく。
	遊び	鬼遊びやゲームなど集団遊びを楽しむ。ルールの理解や面白さをどこに感じるかは個々の幼児で異なり、それが取り組みの違いとなって現れる。 <u>子どもどうしでの言葉でのやりとりが多くなり、それぞれが互いの相手の動きを意識し、自分なりの動きをしていく姿がある。</u>
	保育	一人ひとりの遊びが充実するためには子どもの興味・関心に沿った活動があり、堪能できる。そのための環境作りが必要であり、環境を工夫することで、友達と過ごす楽しさや、遊びの中でお互いが自然にかかわる経験ができ、充実した遊びの展開となる。 またかかわりの中で、意見のすれ違いが生じ、友達の意見を聞く、友達に譲る、我慢する、調整するなど、成長がみられ、集団の中の自分を意識できようになってくる。＝様々な場面で適切に行動できるような判断力や自律性を育てることが重要となる。

5歳	発達	年長児としての役割を意識し、主体的に遊びを展開する。具体的なものだけでなく目標に向けても長期的な見通しを持ち、その過程で生じる問題を解決できるようになる。＝（言葉の伝えあいによるイメージの共有化）
----	----	--

	遊び	より遊びが楽しくなるように子ども同士が意見を出し合い、イメージや考えが伝わり共有化が図られる。このような遊びにしようとする目的に向かって見通しを持ちながら展開する。またその目的のために自らが担える役割を果たしていくことで、自己発揮していくことができる。
	保育	友達の意見を聞き、試行錯誤を繰り返しながら、一緒に協力して達成する喜びを友達と共有し合う。その中で自分も楽しめるようにすることが、次に一緒に取り組もうとする意欲に繋がっていく、こどもが1人1人が思いや考えを伝え合い、それを互いに受け止めながら遊ぶ楽しさを実感でき、それぞれが自己発揮していけるような保育者の援助が大切である。 また遊びの中でのトラブルや葛藤体験は成長のための大切な場面である。諦めず、他者と自分と向きあい、何か手立てを考え、調整していけるようになることが5歳児に求められる大切な育ちである。 保育者はトラブルになった状況で、遊びを一緒にやっつけられる可能性を子どもたちと一緒に模索していくが必要になる。 [子どもの気持ちを落ち着かせる→問題がどこにあるのか把握し焦点化→子どもと解決策や手立てを考える→解決に向かう。] これらの体験から子どもは譲歩するなどして葛藤を乗り越える工夫をして「忍耐」を経験していく。＝自己制御

子ども同士のかかわりの主である“遊び”がどのように変化していくかについてパーテン(Parten,1932)は以下のように分析している。

何もしない行動	興味をひかれたものを眺めたり、移動したりしていることを指している。2.3歳以下でわずかに見られるとされた。
ひとり遊び (2歳頃まで)	他の子の近くで遊んでいても、互いにやり取りがない状態であることを指す。2歳から5歳へ年齢が上がるとともに次第に減少している。
傍観的行動 (2歳半頃)	他の子の遊びを近くで見ている状態である。相手に話しかけることを含む。2歳半頃、頻度が高くなるとされている。
平行遊び (3歳頃)	他の子の近くで、同じようなおもちゃを使って遊んでいるのだが、互いのやりとりが見られない状態。2.3歳で高い頻度で見られるとしている。
連合遊び (4歳頃)	同じ内容の遊びを複数で行うこと。おもちゃもやりとりや、遊びにかかわる会話が生じている。このような遊びは、年齢に伴い増加していく。
共同遊び (5歳頃)	組織化された遊びとも呼ばれ、共通の目標をもって、組織を作って遊ぶ状態である。3歳以下では見られず、4歳から5歳にかけて、年齢が高くなると見られるとしている。

氏名

問題を抱えた人間関係（遊びグループの力関係）

《事例16》

事例16の問題点

事例からみえる人間関係で、保育者として支援していくことは。


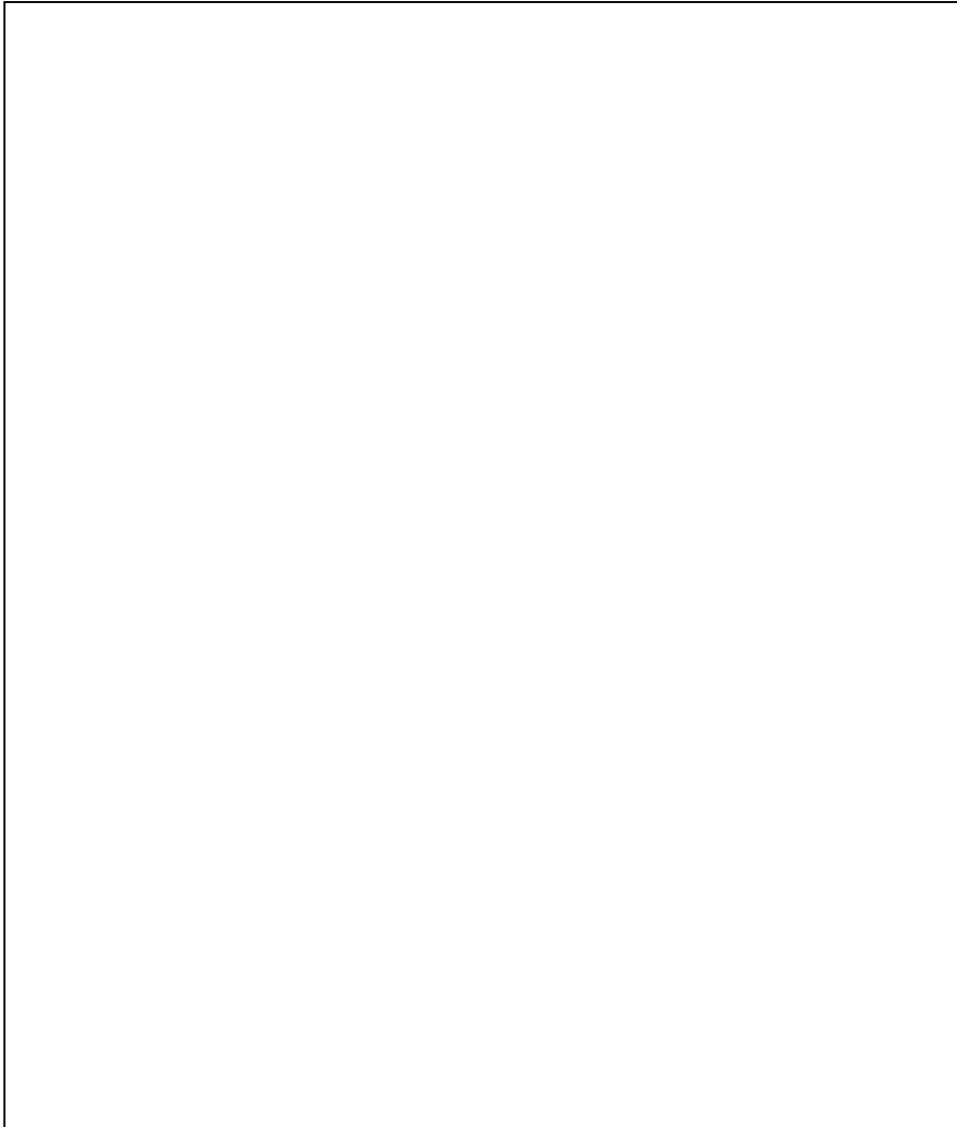
子どもを「みる」ということ、客観的観察の必要はあるが、子どもと直接かかわり、自分の体を通して子どもの心や気持ちを感じとっていくことが重要である。またそれぞれの子どもがそれぞれ多様な家庭環境の中で、多様な人たちとかかわりで个性的に育ってき、また育っていくことを理解し、単にクラスの中の1人として見るだけではなく、その子どもの個人、また個人差を大切に見ていくことが必要である。

- ①信頼関係
- ②安定感と存在感
- ③依存と自立、共同
- ④自己発揮、自己抑制、自我の発達
- ⑤いざこざ、トラブル、葛藤
- ⑥コミュニケーション
- ⑦イメージの共有化
- ⑧役割、人の役に立つ喜び
- ⑨道徳性
- ⑩共感、思いやり

氏名 _____

子どもの異年齢児とかかわりで育つものはどのようなことか。(自分の幼少を振り返りながら、経験から考えられることも踏まえて)

クラスづくりは子どもたちにとってどのような意味があるのか、まとめなさい。



氏名 _____

人間関係の保育計内容と長期見通し 保育所保育指針より

3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
<p>①保育士に様々な欲求を受け止めてもらい、保育士に親しみを持ち安心感をもって生活する。②友だちとごっこ遊びなど楽しむ。</p> <p>③遊具や用具などを貸したり借りたり、順番を持ったり交代したりする。</p> <p>④簡単なきまりを守る。</p> <p>⑤保育士の手伝いをすることを喜ぶ。</p> <p>⑥遊んだあとの片づけをするようになる。</p> <p>⑦年上の友だちと遊んでもらったり、模倣して遊んだりする。</p> <p>⑧地域の人と触れ合うことを喜ぶ。</p>	<p>①保育士や友だちなどとの安定した関係の中で、生き生きと遊ぶ。</p> <p>②自分のしたいこと、してほしいことをはっきり言うようになる。</p> <p>③友だちと生活する中できまりの大切さに気づき、守ろうとする。</p> <p>④保育士の言う事や友だちの考えていることを理解し行動する。</p> <p>⑤身の回りの人に、いたわりや思いやりの気持ちを持つ</p> <p>⑥手伝ったり、人に親切にされることを喜ぶ。</p> <p>⑦他人に迷惑をかけたら謝る。</p> <p>⑧共同のものを大切にし、譲り合って使う。</p> <p>⑨年下の子どもに親しみを持ったり、年上n子どもと積極的に遊ぶ。</p> <p>⑩地域のお年寄りなど身近な人の話を聞いたり話しかけたりする。</p> <p>⑪外国の人など、自分と異なる文化を持った人の存在にきづく。</p>	<p>①保育士や友だちなどとの安定した関係の中で、意欲的に遊ぶ。</p> <p>②簡単なきまりを作り出して、友だちと一緒に遊びを発展させる。</p> <p>③自分の意見を主張するが、相手の意見も受け入れる。</p> <p>④友だちと一緒に食事をし、仕事の仕方が身に付く。</p> <p>⑤友だちへの親しみを広げ、深め、自分たちで作ったきまりを守る</p> <p>⑥友だちへの思いやりを深め一緒に遊んだり悲しんだりする</p> <p>⑦ひとに迷惑をかけるように、人の立場を考えて行動しようとする。</p> <p>⑧共同の遊具や用具を譲り合って使う。</p> <p>⑨異年齢の子どもとのかかわりを深め、思いやりやいたわりの気持ちを持つ。</p> <p>⑩地域のお年寄りなど身近な人に感謝の気持ちをもつ。</p> <p>⑪外国の人など自分とは異なる文化を持った様々な人に関心を持つようになる。</p>	<p>①保育士や友だちなどとの安定した関係の中で、意欲的に生活や遊びを楽しむ。</p> <p>②集団の楽しさが分かり、きまりをついたりして遊ぶ。</p> <p>③進んで自分の意見や立場を主張したり、一方で相手の意見を取り入れたりする。</p> <p>④友だちとの生活や遊びの中できまりがあることの大切さにきづく。</p> <p>⑤自分で目標を決め、それに向かって友だちと協力してやり遂げようとする。</p> <p>⑥友だちとのかかわりの中でよいことや悪いことが分かり判断して行動する。</p> <p>⑦共同の遊具や用具を譲り合って使う。</p> <p>⑧自分より年齢の低い子どもの自ら進んで声かけをして誘い、いたわって遊ぶ。</p> <p>⑨外国のひとなど、自分と異なる文化を持った様々な人に関心を持ち、知ろうとするようになる。</p>

I期	II期	III期	IV期	V期
一人ひとりの遊びや保育者とのふれあいを通じて園生活に親しみ安定していく時期	周囲の人や物への興味や関心が広がり、生活の仕方やきまりがわかり、自分で遊びを広げていく時期	友だちとイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期	友だち関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期	友だちどうして目的に向かって活動を展開しながら、友だちを思いやり、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる時期

6か月末	子どもの心身の機能の未熟性を理解し、家庭の連携を密にしなが、保健・安全に十分配慮し、個人差に応じて欲求を満ち、次第に睡眠と覚醒のリズムを整え、健康な生活リズムを作っていく。また特定の保育士の愛情深い関わりが、基本的な信頼関係の形成に重要であることを認識して担当制を取り入れるなど職員の協力体制を工夫して保育する
6か月から1歳3か月末	身近な人を区別し、安定して関わられる大人を求めると、特定の保育士との関わりを基盤に、歩行や言葉の獲得に向けて著しく発達するので、一人一人の欲求に応え、愛情をこめて、 <u>応答的に</u> 関わられるようにする。家庭との連携を密にし、1日24時間を視野に入れた保育を心がけ、生活が安定するようにする。
1歳3か月から2歳末	保育士は子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重する。自分の気持ちをうまく言葉で表現できないことや、思い通りにいかないことで、時に大人が困ることをすることも <u>保育・発達</u> の過程であると理解して対応する。歩行の確立により、盛んな探索活動が十分できるように環境を整え、 <u>応答的に</u> 関わる
2歳児	全身運動、手指などの微細な運動の発達により、探索活動が盛んになるので、安全に留意して十分活動できるようにする。生活に必要な行動が徐々にできるようになり、自分でやろうとするが、時に甘えたり、思い通りにいかないとかんしゃくをおこすなど、 <u>感情が揺れ動く時期</u> であり、それは <u>自我の順調な育ちであることを受け止め</u> 、さりげなく援助する。また模倣やごっこ遊びの中で <u>保育士が仲立ちすることにより</u> 、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを次第に体験できるようにする。
3歳児	心身ともにめざましい <u>保育・発達</u> を示す時であり、それだけに丁寧な対応が求められる。 <u>自我がはっきりしてくるとともに、それをうまく表現や行動に表すことができないところもあり</u> 、一人一人の発達に注目しながら、優しく受け止める配慮を欠かしてはならない。
4歳児	友だちをはじめ、 <u>人の存在をしっかりと意識</u> できるようになる。友だちと一緒に行動することに喜びを見出し、一方で、けんかをはじめ、人間関係の葛藤にも悩むときである。したがって集団生活の展開に特に留意する必要がある。また心の成長も著しく、自然物への興味・関心を通じた <u>感性の成長</u> にも注目しなければならない
5歳児	毎日の保育所生活を通して、 <u>自主性や規律性が育つ</u> 。さらに集団での生活が充実しきまりの意味も理解できる。また、大人の生活にも目を向けることができる時である。 <u>社会性がめざましく育つこと</u> に留意しながら、こどもの生活を援助していくことが大切である。
6歳児	様々な遊びが大きく発展する時で、特に一人一人のアイデアを盛り込んで創意工夫を凝らす。また思考力や認識力もより豊かに身に付く時である。したがって、保育材料をはじめ、様々な環境の設定にも配慮する必要がある。